

王のごとき気高さ

在俗的な一つの道

世俗に生きるというインスピレーション

アッシジのフランチェスコの生き方に「王のごとき気高さ」を探し求め、伝記の中を訊ね入ると、彼のキリスト的冒険には「在俗的な道」が見出せる。それに気づいたのは、アルミーダ・バレッリに学んだ、王たるキリストの宣教者マリア・スティッコで、「在俗的」だけでなくソルジメント的理義、社会主義者で実証主義者でもあるパードレ・ジェメリの影響も見られる。文学に造詣の深かったマリア・スティッコは、騎士たちが捧げる貴婦人への愛を歌うフランス騎士道物語の影響を、マドンナ・ピーカの息子フランチェスコの人生そのものにというよりは、フランシスカンの「物語り」の中に見出さざるをえなかった。したがってマリア・スティッコは「偉大な王の使者」としてのフランチェスコを提示したのだが、バレッリもジェメリも「聖化されすぎた」キリスト教からは一線引いていた。かれらにとってキリスト教は、近代的な希望である国家独立(国民自治)に鈍感なこの世の権力者としての教皇を弁護する者たちのためではなく、人間たちの街を変容させるパン種、男女こぞって御国の住民となるための文化であり、それはもちろんファシズムでも、ブルジョワ的で軽々しいベル・エポックのそれでもなかった。平和を告げ、つくれしものたちを歌い、人類を普遍的兄弟愛に変容させる、王の使者フランチェスコの国は、まったくちがうものだった。フランシスコ会に入ったが科学者としての非宗教性を保っていたパードレ・ジェメリについて、スティッコは書いている。「フランチェスコが深く感じていた、水、火、大地、赦す者、悔悛者、死にゆく者たちの合唱に加えて、この20世紀の修道者は、自らの仕事と苦役を通して神の企てに協力し、自由に神を礼拝する労働者を加えた」(パードレ・ジェメリ、346)。

今日は、アルミーダ・バレッリの教え子で王たるキリスト在俗布教会の最初の長となったマリア・スティッコの視点からフランシスコ会原典資料をみなさんと一緒に読みたいと思います。

高貴な心を持った商人

貧しい者たちへの気前のことという珍しい傾向があった、アッシジのこの若き商人の望みを、神は「気高さの魅力」で獲得した。最初の伝記作家トンマーゾ・ダ・チェラーノ自身も、その点について詳しく記している。新しい商業文化が押し寄せ、単なる経済的損得に身をゆだね、卑俗的になってしまった街の人々の中にあって、フランチェスコは珍しいほどの優雅さで目立った。殆ど生まれつきの、王のような寛大さをそなえた魂の気高さ。商業文化を侵食する虚栄や貪欲に対して、フランチェスコは魂のおおらかさで対峙する。神が彼の心になだれ込み、ライ病者たちへの憐みのわざに走らせたあの時のことを窺わせる。

商業文化に侵された社会をくどくど非難をしているのではない。宮廷愛という世俗的で解放されたランゲージが、自らが属する社会全体が、ピエトロ・ディ・ベルナルドーネとプロヴァンス生まれのマドンナ・ピーカの息子、教会人間ではないフランチェスコを魅惑し、至高の美の歌い手にまで高めたのだ。偉大な王に克服され、その使者となり、自らが属する商業社会を天の御国、新しい時代へと躍進させたのだ。彼はまさに卓越した「新しい人」、後に会則に書くことになる、異なる御国の市民なのだ。トンマーゾ・ダ・チェラーノが書いているように、最初の兄弟会は商業文化を廃止する意図はなく、そのメンバーの一人を通してそれを克服することを目指していた。

共通善の破壊者である貪欲から、「商い」の最初で根源的な目的である、すべての人との兄弟愛を確立する寛大さへ移ること。「商い」とは、出会いと交換の場なのだから。

みんなの驚嘆の的であった彼は、底知れぬ野心をもち、どこにいてもだれよりも上に立とうとした。遊びにおいても、優雅においても、話し振りや歌声、豪華で洗練された服装においても。彼はとても裕福だったが、けちではなく、むしろ気前がよかつた。金に執着せず、どちらかといえば浪費する方だった。明敏な商人である一方、うぬぼれのために極度に気前がよかつた。それだけではない。とても礼儀正しく、ひとに対しておおらかで感じがよく、優しかった。しかし、これらはすべて自分を害するものだった。というのも、悪に身を任せた

者やその扇動者たちが彼を気に入り、味方となつたからである。こうして、騒がしい無法者たちに囲まれ、誇らしげに、気前よさを振りまきながら、バビロニアの広場を闊歩していた。神が、御慈しみによってこの男に目を向け、御怒りを遠ざけ、まったく死んでしまわないようにと、この哀れな者の口に「贊美」というはみを噛ませるまで…。(チエラーノ I, ff 320)

神の求愛

生まれつき持っていた高貴さと寛大さが、フランチェスコをすでに回心へと導く道を引いていたが、王たる神の求愛こそが、その生来の寛大さを超えて、騎士道的勇断への憧れを燃やさせた。そして内なる変容が深まっていく中、「商人」は騎士の美德へと惹かれていく。十字軍の冒険に熱中し、アッシジのある貴族の軍団に加わってプーリア地方に出征する決意をした。教皇イノセント3世自身、アーサー王の円卓の騎士のごとく、騎士たちを自らの周りに呼び寄せていました。教皇の保護国を統治するまだ若きフェデリーコ2世が強力な君主たちの陰謀から国を守れないのではないかと懸念していたのだ。トンマーゾ・ダ・チエラーノはその伝記の中で商人が騎士に変容する様を記している。自らの命さえ顧みないほどの大胆さ、寛大さ、壯麗さを備えた、騎士の心意気。騎士文学に登場するシャルル王の聖騎士(パラディン)、ローラン、オリヴィエなどの美德を称える宫廷愛の歌い手という中間点を通りつつ、「商人」は「偉大なる王の使者」へと進化して行ったのだ。

その頃、アッシジのある騎士が、軍を出そうと本格的に準備をしていた。野心家で、大金と名誉を得るためにプーリア地方まで軍隊を派遣しようとしていたのである。それを知ったフランチェスコはすぐに乗り気になり、^{ところ} 参加しようと勇敢にも名乗り出た。その騎士より出生は劣っていたが 魂の偉大さでは負けず、彼ほど裕福ではなかったが、潔さ、寛大さでは勝っていた。(チエラーノ II, ff 325)

夢のことば

宫廷騎士たちの冒険に満ちた夢がフランチェスコに歩むべき道を示す一方、偉大な王である神自身が「その」ことば(意欲)に自らを適応させることを恥じず、夜の幻想的なヴィジョンを通して、その声を聞く体験をさせる。神は騎士の世界にそっと忍び込む。商人の店の象徴でもある山積みになった衣服の代わりに、貧しき者たちの共同体の母なる貧しき貴婦人の花婿、未来の高貴な王にふさわしい、幻想的な輝かしい武具の夢を見せたのだ。

その前夜、義の鞭で打った方がめぐみ(gratia)の甘美さで夢の中に訪れた。(フランチェスコは)栄光を切に求めていたので、より高い栄光への夢を示して彼の心を獲得した。夢の中でフランチェスコは家が鞍、盾、槍、弾薬など、武具で敷き詰められているのを見た。これは何だろと驚きつつも、大いに喜んだ。家にそのような物が置かれていることはなかったのだから。事実、家にはいつも商い用の布地がいっぱい置かれていたのだ。思いもよらない出来事に驚いていると、声が聞こえた。「これらの武具は全部おまえとおまえの兵士たちのものだ」(チエラーノ II, ff 326)

回心は上からの介入で、目を見張る問答無用な出来事を通して起きるものではない。むしろ至高の王の信奉者たちの願いや希望を大切にする、日々の積み重ね、長いプロセスによる。フランチェスコはプーリアには出発しなかった。時を経るにつれて、自分の夢の解釈はおそらく当たっていないかと思ったようになつた。しかし、騎士の夢、王の気高さの魅力は、時がたつにつれて彼の内に新しい決意を準備していった。今は商人の役割も、騎士の役割も担つておらず、甲冑を含む、すべての自分の服を売り飛ばさなければならないと感じた。そうすることで、貴重で二つとない、真に「王のような真珠」を買うことができるのだから。

すでに靈的に変貌していたのだが、それを誰にも察せられないようにしながら、フランチェスコはプーリア行きを断念し、自らの意思を神のそれに合わせようとした。騒がしい世俗や商売から遠ざかり、自らの心の奥底にイエス・キリストを大切に守ろうとした。見つけた真珠を人の目から隠し(マタイ 13, 45-46)、全所有物を売つて人知れずそれを買おうとする慎重な商人のようだった。(チエラーノ III, ff 328)

最初の仲間の眼差し

トンマーザ・ダ・チェラーノが語るこの未来の「マドンナ・ポヴェルタ(清貧という名の貴婦人)の騎士」の変化に、「3人の仲間の伝記」がより詳しい説明をいくつか加えている。兄弟会の発足当初からフランチェスコと共にいた、ルフィーノ、レオーネ、アンジェロの証言である。このフランチェスコの仲間たちは、プーリアに向かう騎士の出発という出来事の前に、「コッレストラーダの戦い」を挙げている。それは貴族たちと商人たち、貴族文化と商人文化の戦いだった。商人はこの戦いで敗北者になるが、それは戦争に負けたという物質的な面においてではなく、文化的、象徴的、靈的な面においてであった。事実、この敗北のせいで、捕虜となって数か月もの間独房で重い鎖につながれていたフランチェスコは病気になったが、それだけではなく、ペルージャの牢獄で、おぼろげな視界のなか、彼の内に全面的な変容が起きていた。その結果として騎士道を選ぶことになり、商人のアイデンティティを捨て、騎士道的宮廷愛のアイデンティティを身に着ける。

この展開(逆転)は、フランチェスコが自分の豪奢な服を一人の没落貴族に譲る場面に描かれている。スルピキウス・セヴェルス著の聖マルティヌス伝でマルティヌスが一人の貧しい人に上着を献上するエピソードから一部取ったものだ。「3人の仲間の伝記」では、フランチェスコがしたのは、寒さに凍える貧しい人への慈善だけではなく、没落した貴族性を再取得されることでもあった。おごり高ぶる商業権力に追いやられ、無益で、社会の進歩のプロセスを妨害すると思われた貴族性を抹殺しようとするコッレストラーダの戦いとは正反対なのだ。今、商人は満足できずに横たわり、自らの目標の無意味さを認める。王の高貴さを探し求め、商業的成功とは別の道を探し求める。

事実、「3人の仲間の伝記」でも、その初めから、商人の散文性に対抗する貴族性をはっきり打ち出し、貴婦人への愛を唄うプロヴァンスの吟遊詩と並べている。

若者になり、聰明さに輝いていたフランチェスコは、父親の職業を継いで布地の取引を始めた。が、父とは全く異なるスタイルだった…。何度も両親は彼のあまりの気前良さに文句を言った。商人の子ではなく、まるで偉大な君主の跡取り息子のようにふるまっていたのだ。近所の人達がフランチェスコの道楽について噂しているのを耳にした母親はこう答えていた。「わたしの子についてどうお思いですか。良くも悪くも彼も神の子なので…」。彼は自分の社会的立場には不釣り合いな、最高に豪奢な服を作させていた。(3人の仲間の伝記 I, FF 1396)

3人の仲間にすると、没落した貴族に気前よく施したことによって、さらに根本的な逆転が準備された。別の「高貴さ」、別の「王らしさ(王性)」に憧れるようになるのだった。「3人の仲間の伝記」によると、最初の伝記作家に比べて、スローレで見た夢における高いよき主のメッセージはより明確になる。「おまえにとって、あるじと下僕では、どちらがより有益か?」「あるじです」と答えると、声は「それではなぜ僕(しもべ)を追ってあるじを、家来を追って君主を捨てるのか」と言う。祭りの主役、気前のいいアッジの商人、騎士道の気高さに憧れる志願者は、自らのもっとも深い願望、自らの欲求を完全に満たす王国とは何か、理解し始める。

アッジに戻って数日後、「好きなように楽しいタベを企画するように」と、友人たちがフランチェスコを祭りの王に任命する。何度もやってきたように、彼は豪華な晩餐会を企画する。宴會が終わり、皆家から出てきた。友人たちは彼の前を歩いていた。彼は王冠のようなものを手にして、最後にやって来た。でも歌うでもなく、何らかの思いに心奪われているかのようだった。突然、主は彼を訪れた。そのあまりの甘美さで心が満たされ、あらゆる感覚から遮断されて、その溢れんばかりの甘美さゆえに動くことも話すこともできなくなつた。(その後彼自身が語るように)その場所から、たとえ体が切り刻まれたとしても、動くことは不可能だった。友人たちは後ろを振り返り、彼が遠くにいるのを見つけ、戻って来た。すると、彼のあまりの変容ぶりに、まるで別人のようになった彼に驚き、唖然とし、質問した。「何を考えていたんだい? なんでぼくたちについて来なかつたんだ。妻をめどる空想でもしていたのかい?」 彼は息せき切ってこたえた。「そうなんだ。みんなが見たこともない、もっとも高貴で、裕福で、美しい女性を花嫁に迎える夢を見ていたんだ」。(3人の仲間の伝記 III, FF 1402)

プロヴァンスの詩人たちのことばがまだしばらくの間フランチェスコの変容の記号となっていた。Domina paupertatae の王のごとき気高さの発見の結果がすでに垣間見られるとはいえ、次のローマ巡礼の場面でも、フランチェスコがフランス語で物乞いをするなど、宮廷愛的エレジーが戻ってくる。次に続くのは、ある日、貧者に服を交換しようと願い出る、トロヴァドール的振る舞いの場面だ。没落した貴族に貴重な服を差し出すことから、今回は貧者と衣服を交換する場面に移る。しかしそれも短い期間で、「体全体の変容」に進むまでのゲネプロみたいなものだ。それは次のエピソード、ライ病患者の場面で起こる。ここでは、階級の利益感覚を守ろうとするコッレストラーダの商人の凝り固まつた理想は、ミゼリコルディア(憐み)の内に、ミーゼロ(貧者)への憐みの心の内に、完全に溺れる。そしてもう一つの、神の王的気高さから発せられるもう一つの甘美さが、いまや彼の光への願いに火を灯す。「いと高き栄光の神がわたしの心の闇を照らしてくださいますように…」。

伝記でトンマーゾ・ダ・チェラーノは、商人文化との最終的な別れは、布地を売って金銭に変えるためにフォリーニョに出掛けた騎士の最後の旅に見られるとしている。サン・ダミアーノ教会の隅の窓遠くに、侮蔑してその金銭を投げ捨てたのだ。商取引の男が、後悔して、いまや金銭を石ころと見なしたのだ。まさにこの事を会則にフランチェスコは書き記している。フランチェスコは父との衝突を、商人文化との最終的な決別を決めた。騎士道的高貴さは、この変化の仲介役をし、新しい「王的気高さ」の、天のそれの、ことばを誕生させた。会則に入れた清貧の詩にそれを読むことができる。

「これこそがいと高き貧しさの崇高さである。愛するわたしの兄弟たち、天の国の相続人であり王であるあなたがたを、物には貧しく、徳には豊かにしたのだ。これがあなた方が受け継いだもの、嗣業、生きる者たちの地にまで導くのだ」

商人の願望を養い、当時の商業社会・政治システムから排除されていたライ病者のもとにまで連れて行った「王的気高さ」は、いのちある者の地の市民のしるしとなる。

それでは、アルミーダ・バレッリとアゴスティーノ・ジェメリリに、かれらが創立した会の名称に「王たる」ということばを入れる決意をさせた理由は何か？当時の自由主義国家とそれに続いたファシスト政権下の政治経済力に替わる何らかの提案をしたいという発想があったのかもしれない。発足しつつあった女性の会に最初につけられた名前は「Terziarie francescane del Regno sociale del Sacro Cuore di Gesù イエスのみこころの社会的王国のフランシスコ会第三女性会員」だった。実際、キリスト者たちが集まり、教会共同体を設立し、教会としての存在を生きる権利行使したかったのだ。リベラル派の教義では、宗教は個人的なものであって、公けの場に出てはいけないことになっていた。組織化やなんらかの会の設立などを支えるのは、唯一国家権力の特権とみなされていた。一方、他に社会の組織化に係るのは社会主義だったが、個人の人権の価値を弾圧し、必要ならば暴力も社会変革も容認し、経済的必要性を満足させることのみを目標としていた。

自由主義国家の最初の数十年では、一方的な教皇国廃止への反応もひとつの要因となり、カトリック信者たちは政治活動からの完全撤退をした。第一次世界大戦が起きて初めて、イタリア人カトリック教徒は市民であると感じ、かれらに政治思想や社会理念を持つことを禁じる國へ愛国心を抱いた。そこで戦後にはまずは、すでにジェメリリが個人的に体験していた、社会主義者の提案と対峙し、次に国家組織のみでなく、良心や自由意志でさえ指揮して思いのままにし、最終的には「自らの宗教」を押し付けるファシズムが強行しようとする倫理国家と対峙することになった。

まさにこの究極の時、バレッリやジェメリリにかなり近い考え方を持ち、カトリック大学を推進する教皇ピオ11世は、回勅 Quas Primas(1925年発令)を通して、「regalità 王らしさ(王性)」の教義を打ち出し、それは設立されようとしていた会の新しい名称の元になり、1928年、ピオ11世自身の主導で、「Missionarie della Regalità di nostro Signore Gesù Cristo(王たるキリスト在俗布教会)」という名称で誕生した。この「regalità 王らしさ(王性)」の教えによって、社会主義やファシズムに対して、キリスト者が政治的、社会的、人類学的面でも別の道を示すことができる。もしキリストが祭司だけでなく王でもあつたら、それはキリストに属する者に政治的責任を担う権限を与え、同時に、救世論的な立場だけでなく、現世的・歴史的な観点からも王国を建設する義務と努力が必要とされることになる。しかし、それは単なる政治的活動なのではなく、バレッリとジェメリリにとって、それはとりわけ、カトリック大学自体の目標でもある文化・社会・労働・教育を取り込む目標をめざすこと、カトリック信者に文化をもたらし、カトリック信者を文化の中に連れてくるという、真にファシズムのヴィジョンに対抗するものだった。

このピオ11世の magistero(教会の正当な教え)は、ジェメリリに、キリストの首位性というフランシスコ会の伝統を現代のことばに訳す可能性を与える。十字架という玉座に座す、王なるキリスト、そのわき腹からいのちの水を、愛の血を注ぎ出す方は、すべてのものを一つにする中心なのだ。すべては彼から始まり、彼を目指している。フランチェスコの「わが神、わがすべて」なのだ。すべての中におられる神、なぜならすべてが彼の内に意義を見出すから。「つく

られしものたちの歌」の中でフランチェスコが兄弟姉妹と呼ぶ、あらゆるつくられしものたちの中に。ステイツコが述べるように、この「歌」そのものをジェメリッリは現実化したいのだ。労働者の歌という一節を付け加えて。なぜなら労働に聖なる価値を、真の典礼の価値を認めていたから。もしキリストが祭司だけでなく王だとしたら、聖性と世俗性は分離されていない。神と自然、天と地、すべては聖なのだ。あらゆる出来事、現実、人生のあらゆる一かけら。政治、経済、科学、歴史全体が。この普遍的・宇宙的「regalità 王性」の姿に、ジェメリッリはボナヴェントゥーラとヨハネス・ドゥンス・スコトゥスが明言していた、すべての一への集中（一へ向かうすべて）の教えを見た。この姿（イメージ）のおかげで、キリストの魂から血を流させる傷、科学と信仰、宗教と生命、憐みと文化の分断を癒す可能性を見出しができる。

磔刑者への愛が、福音者ヨハネやパウロ同様、スコトゥスに、宇宙の中心であり王なるキリストを称賛させる。この目を見張る感覚はフランシスカン性を生命の贊美に直結させる。なぜならそれは自然、歴史、人間たちのこと、すべてを、聖なる光の内に連れて行き、たとえ反抗的であったとしても、つくられしものたち、あらゆる出来事が唯一の仲介者のもとに連れて行かれ、自ら進んでなったとしてもさせられたとしても、一人の労働者、一人の兵士となり、唯一の仲介者の勝利に、神の王国に招かれるのだ。なぜなら、ライモンド・ルッロが言うように、世界はほかでもない、キリストになるために創造されたのだから。

（ジェメリッリ、Francescanesimo フランシスカニズム 446）

アルミーダもまた、ピオ 11 世の「Regalità 王性」の中に、フランシスカン的ビジョンを通して、キリスト者の全域において責任を果たす努力の可能性を見る。

カトリックの医者をつく直しましょう。非道徳的新聞・著書があるからといって、メディアを糾弾しても始まらないから、カトリックのジャーナリスト、作家を育てなければなりません。過ちを教えたり、宗教の侮蔑を教えたる学校や教師がいるからと言って、無知を望むなんて不合理です。それよりも新しい世代のカトリックの先生や教師たちを養成すべきです（…）社会において、民の間に、日々の生活の中に、新聞の中、本の中、病院の中、裁判所の中、学校で、そして道端でも、キリストが勝利しますように。（オッセルヴァトーレ・ロマーノ誌、1937 年 3 月 28/29 日）

こうして、世俗性も聖化される。キリストは王であると明言することは、神は神殿の中に住んでおられるのではなく、神殿の fanum（神殿の玄関の聖域）の外の事柄にも興味を持たれると言うのと同じなのだ。ジェメリッリ以上にカトリック大学の設立を切に望んでいるアルミーダ、慈善事業にだけでなく文化事業にも融資するようロンバルド伯爵を説得したアルミーダにとっては、人間がゆだねられた庭を創造のわざを続けるがごとく守っていくようにと、存在するあらゆることを創造することばとなって、神は実際に神殿から出たのだ。それゆえ、人間の営みで典礼でない事柄はなく、労働で神聖でないものはなく、神の天才性に参加しない科学はないのだ。

受肉を通して、みことばは、「ありてある方」である神が、時の、歴史の、世俗の中に住むことを学ぶことを、天地創造の時から準備ができていたのだ。年齢と共にめぐみも成長していった大工の息子は、こうして世俗が神の住まいであることを、歴史がその体であることを証明した。なぜならジェメリッリが明言するように、キリストは、全人類の一致のサクラメント（秘跡）であるよう呼ばれている教会の頭（かしら）だからだ。そこでアルミーダは、直感的に完ぺきに理解する。政治する緊急性が提示されたとき、政治しなければならないのだ。政治は汚らわしいものではない。もしうだとしても！

会がまだ承認されていなかった時点で、勇気ある姉は国のために行動を起こす。「1946年の最初の 5 カ月、会員は全員、6 月 2 日の選挙の準備のために労苦を惜しまず働いた。（…）召命を受けた会員は隠れた酵母として、自らが担う社会的役割を通じて、選挙活動のパンの中に練り込まれていた。

ユダヤ人の王と名のった罪でピラトの前に連れて来られた主も、おそらく汚れはしなかったであろう。この regalità（王であること）について尋問され、「Sì 然り」とこたえたのだ。王であるが、それは権力者たちのようにではない、と言って。その「王性」は心（心臓）を刺し貫かされることを受け入れる。「regalità 王性」が世俗と同等に身を置くのなら、ピラトとの対峙をも受け入れる。そうすれば、この「世俗性」を通して実現した聖化は、歴史への受け渡しであり、全歴史の、それぞれの歴史への受け渡し、心臓に向けて投げられる槍に対する「Sì 受諾」である。